

画教仙人 東 白陵についての講演のまとめ

2010年2月6日

牧野芳子

一生に一度の七年かけた自費出版をしてから早や十年になった。縁あって経緯や内容を話す機会に恵まれた。これも一生に一度のことだろう。三十人ほど集まってくださった方々に、白陵の存在や生き方を知ってもらい私の感動を伝えたい。いろいろな不安を忘れて自分の個性でやることにした。

準備としてレジメを含む三枚の資料を二ヶ月前に作成して提出できた。十年前の本を何度か読み直して、覚えきれない部分をレジメに書き込む。OHP用に本の写真や図を拡大コピーして、話の順にそろえる。自分の彫刻の写真や、本を十冊ほど用意し、会場に早くいった。

当日、OHP用のコピーやメモ書きを車内に忘れてあわてた。話に合わせて本の写真や図を写してもらおう。自分の彫刻写真や本の展示が、話のあとになってしまい又あわてた。何とか話は出来たが、肝心の白陵の生き方や人となり・存在の意味が十分に話せなかった。何箇所か笑いをとる話し方をすればよかったと思う。笑いは会場や人の心を和ませて、集中して聞いてもらえるだろう。

少し早く終わったので、オカリナを吹いたが、あまり時間稼ぎにならなかった。話し慣れたらもう少し上手く話せるだろうか。

質問タイムに「本当にいい多くの出会いをされましたね」という嬉しい言葉をもらった。「白陵に魅せられたわけは？」に「白陵の写真を見て」といったが少し受けたかな。私の面白がりや感動する癖と言うか、自分の教師生活を振り返って、成し得なかった事がここにあると思った。又別れて住んだ「白陵の夫婦仲」を心配する人がいたが、奥さんも生活力を持っていたし、白陵と共に生活はできなかったのだろうか。白陵の信念を貫いた生き方でしかない。「内藤湖南の三男は画家だったが、交流はあったのか？」調べる手がかりはないが、木津川市の文化人として、内藤湖南や白陵など、業績を明らかにして記録したものを造るべきだと思った。

終了後の会で、「昔の文化人は、全国巡り歩いた。土地の人は文化に憧れ、文化人から学ぼうと集まり、お世話をするのが当然だった」白陵は戦後のその時代だからこそ光り輝いていた。暖かい人情を通わせたよき時代の、最後の人だろう。又、「昔は先生にあだ名をつけていた。」木津高の生徒も「白陵、白陵」と尊敬と親しみを込めていっていた。くに山荘に内藤湖南の遺品があるそうだ。地元の文化人の一人として白陵の絵やゆかりの品を集めて置くところをぜひ造りたい。各個人が持っていていつかは消えてしまう。文化を求めた人々の郷土や子供を愛し、時代を見抜いて個性を生かし、自他共に豊かな感性を磨いた心の広い白陵の生き方こそ私の憧れである。

最後に、この機会を設けてくださった西村先生や、準備をしてくださった方々に、心よりお礼を申し上げます。